(番外編)朝方の出会い

四神　夏菊

飛来

　ミスティックルーイン　テイルスの工房

時刻はちょうど夜明けの時
一人工房内のベットで寝ているテイルス

「スー　スー　ｚｚｚｚ」

まだまだ目覚めそうにない気配
でもその眠気をさえぎる音が。

　ドーーーーーーーン！！！

地響きとともに聞こえた音

ボフッ！　　「いったたた・・・」

工房は激しく揺れ、テイルスはベットから落ち、布団の上へ落っこちた。

「・・・何事？」

テイルスは眠気眼を擦りながら窓のそばへ。
窓から外を覗くと飛行機が地面に多少埋め込まれ煙を上げていた。

「大変！！」

テイルスは急いで靴を履き窓を開け外へ飛び出した。

距離はそれほどでもなく数分足らずで着地地点へ。
そこには一人乗りの小型の飛行機が不時着していた。

ドンドン！！　　「大丈夫ですか？」

テイルスは操縦席の窓を叩きながら操縦主を確認した。
中は真っ暗でよく見えない。
もう一回叩こうとすると窓が開き、中からパイロットが出てきた。

「大丈夫ですか？」
「ああ、平気だ。」
「え！　キツネ！？」

テイルスの前に出てきたパイロットはなんとキツネだった。

「？　どうかしたか？」

パイロットはテイルスを見て首をかしげていた。

「い、いえなんでもないです。」
「？」

テイルスは首を振ってパイロットを見た。
パイロットの背丈はテイルスより背が高く、服は軍服を身をまとっており、軍隊のような感じだった。

「とりあえず何があったんですか？」

テイルスは相手のパイロットに尋ねた。

「ああ、ちょっと相手と遣り合っていたらワープに巻き込まれてここの外に出てきたんだ。」
「ここの外？　って事は宇宙！？？」
「ああ、そうだが。見たところ君もキツネみたいだな。」
「あ、はい、僕もキツネです。」
「別の次元にも違うキツネがいたんだ。」
「？」

あまりかみあっていない会話をしながら二人とも見た目を見ていた。

「とりあえずまたもといた所に帰らないと。」

相手のパイロットは戦闘機を見ながら言った。
戦闘機は周りが所々壊れており、無事飛べるかはイマイチ不明。

「ちょっと手が掛かりそうだな・・・」
「あの、僕が直しましょうか？」
「君が？　直せるかい？」
「ちょっと見させてください。」

テイルスは見たことの無い戦闘機の内部構造や外見当をチェックした。

「あ、コレくらいなら直せます。」
「本当かい？」
「はい。」
「じゃあお願いしてもいいかな。」
「いいですよ。あ、まだお名前聞いてませんでしたね。僕はマイルス・パウワー、皆からはテイルスって呼ばれてます。あなたは？」
「自分はフォックス・マクラウドだ。じゃあ改めてテイルス、修理をお願いしてもいいか？」
「もちろんですフォックス。」

テイルスとフォックスは戦闘機であるアーウィンをもって工房へ戻っていった。

「うーん、やっぱり見たこと無い飛行機だけど大体構造は似てる。これって戦闘機？」

テイルスはアーウィンを修理しながらフォックスへ尋ねた。

「ああ、オレがいたところではコレが唯一の高性能の空中用戦闘機なんだ。」
「すごいねー、多彩な攻撃ができるしこの戦闘機事態回れるんだ。フォックスが作ったの？」
「いや、俺達がいた所の軍が作った物なんだ。修理は主にスリッピーがやってるが。」
「その人、やっぱりメカマニアなの？」
「俺らよりずっとメカに詳しいな。持ってる武器とかもスリッピーが作ったものが主だから。」
「どういうの？」
「コレだ。」

フォックスは腰から下げていたメカをテイルスに差し出した。

「コレは何に使うの？」
「飛び道具をすべて跳ね返すことが出来るリフレクターを発生させるメカなんだ。ビームでもミサイルでも。」
「とても高性能なのにこんなにコンパクト。やっぱりすごいねー」

テイルスはフォックスにリフレクターを返した。

「もう少しで終わるからもうちょっと待っててね。」
「ああ、じゃあちょっと外へ出てるよ。」
「いってらっしゃーい。」

フォックスはガレージを出て外へ出て行った。
外へ出ると朝日を迎えて少し時間が経っていた頃だった。
朝日を浴びながらフォックスは草原の上に横へなった。
そして軽い寝息を立てて寝てしまった。

出発

「よし！　修理完了☆」
テイルスは修理が終わったアーウィンを見て言った。
「でもちょっと黒ずんでる所があるね。」
アーウィンは長年の戦いで少し焦げたりして外壁が少し黒ずんでいた。
「せっかくだから綺麗にしようかな。フォックスに聞いてこよっと。」
テイルスは外に出て行ったフォックスを探しに出て行った。
「フォックスー」
テイルスはフォックスを呼びながら辺りを探した。
すると工房から少し離れた草原で横になってるフォックスを見つけた。
「あ、いたいた、フォッ、」
テイルスは呼ぼうとしたが途中で呼ぶのをやめた。
フォックスは毛を風にゆらされながら寝ていたのだ。
『確か戦っていてここに来たって言ってたっけ・・・　起こすのは難だからもう少し寝かせとこっと。』
テイルスはフォックスを置いといてまたガレージに戻っていった。

そしてしばらく時間が過ぎること４時間　時刻はお昼前。
「うーーん。よく寝たー」
フォックスは体を起こし背伸びをした。
「もうアーウィンは直ったかな。」
フォックスは工房へ戻っていった。
「テイルスー」
工房へ戻ってきたフォックス。
でもテイルスの姿が見えない。
「テイルス？」
フォックスは工房内を見回すと部屋の置くの扉が少し開いていた。
部屋の覗くとテイルスがベットの上に横になっていた。
かすかに寝息も聞こえる。
『寝ちまったのか。まあ朝方に起こしたんだもんな。仕方ないか。』
フォックスはテイルスに毛布をかけ部屋を後にした。
フォックスは戻ってアーウィンの元へ。
アーウィンはピカピカになっており、外壁のコゲや黒ずみが無くなっていた。
近くに水道につながれたホースとブラシ、洗剤等が置いてあった。
『綺麗にしておいてくれたのか。ん？』
アーウィンの操縦席に置手紙が置いてあった。

『勝手にお掃除しちゃってごめんなさい。フォックスが寝てたし、アーウィンがちょっと汚れてたから綺麗にさせてもらっちゃった。』
『僕ちょっと眠くなっちゃったから寝るね。起きてもう出発時だったら行ってきていいよ。また遊びに着てね。　テイルス』

「すまないなテイルス。じゃあ早速、綺麗になったアーウィンで飛ばせて貰うよ！」

フォックスは操縦席に乗り込み、エンジンをＯＮにした。

「行くぜ！！」

フォックスを乗せたアーウィンは一気に飛び出した。

「おお、結構操縦しやすくなってる、テイルス　いろいろとやったみたいだな。」

フォックスは操縦席からテイルスを見て、宇宙へと飛んでいった。
テイルスはまた静かに眠りについていった。

　ＥＮＤ

(番外編)朝方の出会い

http://p.booklog.jp/book/89209

著者：四神　夏菊
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/lilysfia/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/89209

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/89209

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ